アンフォルメル中川村美術館
開館30周年記念展

新・空間縁起

2023.7.27thu - 11.30thu
10:00-17:00　受付終了：16:30　火・水曜日は休館

南信州の山、川、谷を展望する尾根の上にスペクタルに展開する異形の建築は、
30年前に開館したアンフォルメル中川村美術館です。
第二次大戦後フランスに勃興したアンフォルメルの美術に共鳴した実業家で画家、詩人でもあった
鈴木崧（すずき・たかし）が、異彩の建築家・毛綱毅曠（もづな・きこう）に依頼して建てたものです。
以来、県内でも数少ない現代美術館として中川村の人々が守り続け30年を迎えました。
バブリーな時代を経て久しい「ポストコロナ」の今日、空間と身体をめぐり、
今回7人の現代美術家が、この地のこの場所で新たな表現を展開します。

／stone

「石の中を見たい」という問いから始まった「時のカプセル」シリーズ。内と外は凸凹の関係でありながら、どちらが内で、どちらが外か、見る者を想像の世界に誘う。原石を二つに割り、中をくり抜き、二つの石を再び元に戻してカプセルにする。削岩機であけた穴の一本一本の線が、私と石との対峙した時を刻んでいる。くり抜かれた石の中は確かに存在していた。再び合わされたカプセルの中で、私が石と過ごした時間と空間と記憶を内包して…。

1959年、長野県生まれ。1981年、信州大学教育学部美術科卒業。2003年、新制作展・新作家賞。05年、富嶽ビエンナーレ展・大賞（静岡県立美術館/静岡）。11年、愛知県立芸術大学大学院修了。17年、中谷聡作品展ー時のカプセル（辰野美術館/長野）。18年、あさごアートコンペティション（あさご芸術の森美術館/兵庫）。22年、UBEビエンナーレ現代日本彫刻展模型入選（ときわ湖水ホール/山口）、枕崎国際芸術賞展（枕崎文化資料センター南溟館/鹿児島）。23年、愛知県立芸術大学退任記念中谷聡展（茅野市民ギャラリー/長野）。

中谷　聡
（なかや・さとし）
彫刻

《時のカプセル・F》2011年

《Light sculpture #20》2018年

丸山　晋一
（まるやま・しんいち）
写真

テクノロジーを活用して、肉眼では見えない、儚い隠れた美を発見し、捉えたいと考えています。長野で生まれ育ち、好きな被写体にカメラを向けて楽しんでいました。東京や海外でさまざまな仕事をしてきましたが、今は撮りたいと思う被写体を模索中です。それはまるで原点に戻っていくようです。

1968年、長野県生まれ。千葉大学工学部画像工学科卒業。2001年、インド最北部の高地を３年にわたって訪れて撮影した写真集「SPITI」を刊行。写真展「SPITI」開催（ギャラリー・ロケット/東京）。2003年、ニューヨークへ移住。07年、「125 Magazine日本展」出品（ポール・スミス・スペースギャラリー/東京）。09年、写真展「KUSHO」（ザ・ブルース・シルベスタイン・ギャラリー/NY）を開催し、写真集「空書/KUSHO」刊行。ニュージーランド在住。

／space

《Steps》2019年：
象の鼻パーク/横浜市
ZOU-NO-HANA
10TH ANNIVERSARY,
FUTURESCAPE PROJECT

持田　敦子
（もちだ・あつこ）
インスタレーション

鈴木崧氏の構想のもとに、建築家毛綱毅曠氏の設計したアンフォルメル中川村美術館の外部に、足場材を利用した仮設的な構造物をつくる。物語性が強い特徴的な建築空間に展開される構造物は、建築や周囲の景観と時に響きあい、反発しあいながら立ち現れる。想定された建築の機能に反抗するように生み出される新たな動線により、空間を新たな視点から捉えることができる。

1989年、東京都生まれ。2018年、東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。バウハウス大学大学院修了。18～19年、ボーラ美術振興財団在外研修。18年、日本・キューバ現代美術展出展（キューバ/東京）。19年、フューチャー・スケープ・プロジェクト出展（象の鼻パーク/横浜）。21年、Open Storage 2021ー拡張する収蔵庫（北加賀屋/大阪）、北アルプス国際芸術祭出展（大町市/長野）。TERRADA ART AWARD 2021 ファイナリスト展受賞（寺田倉庫/東京）。23年、廃屋による《解体》制作（飯田市/長野）

《sky cloud》2020年：茅野市民館東広場/茅野市
Photo：飯嶋昌之

塚田　裕
（つかだ・ひろし）
絵画／インスタレーション

中川村飯沼の棚田では地元の造り酒屋の酒米が作られています。その８ヘクタール全部のワラを使う今展のインスタレーションは、壮大なプロジェクトです。中川西小５年生が植えた稲のワラも使わせてもらえることになりました。一年という時間の中で米を育てる大勢の人々がいてこそ、成り立つ作品です。ありふれた日々の、あたりまえのようにある物や物事は中川村のおおらかで親切な人々の気持ちや、植物が成長するサイクルの小さな奇跡の連続のようです。軽トラ25台分に及ぶ大量のワラは、この日常の先にあるものです。戦争の危機がある今だからこそ、僕個人の思惑を超えて平和でなければ存在しえない、そんな意味を持つ彫刻となればいいと思っています。

1966年、長野県生まれ。和光大学人文学部芸術学科油彩専攻卒業。2003～08年、眞板雅文（1944－2009）のアシスタントを務める。05年、個展（みゆき画廊/東京）、07、09、11年、シュライニング国際音楽祭（オーストリア）招聘展示。09～17年、山中湖国際音楽祭（山梨）招聘展示。11～19年、個展（画廊るたん/東京、松本市美術館市民ギャラリー、Gallery Amano/山梨）。20年、シンビズム３（茅野市美術館）出展。21年、個展・INSIDE/OUTSIDE（原村八ヶ岳美術館/長野）。

／earth

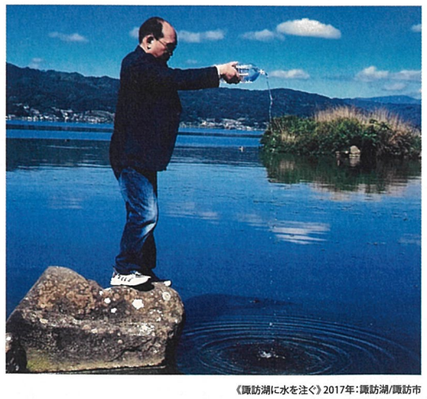
眞板雅文が目にしたものが次々に素材となって、物質を超え、彫刻として現れる。初め写真や電灯などによるインスタレーション、次いで様々な場所で得たロープや布は呪術性さえ帯びた作品となり、やがて自然との関わりの中で、水にこだわった表現が続いてきた。急逝する２年前に自身のアトリエ周辺の水田を使った大がかりなインスタレーションは、谷を隔てた甲斐駒ケ岳の姿さえ取り込んだものだった。今展では水にかかわる作品を館の内外で展示する予定。（赤羽）

1944年、中国東北部生まれ。69年、現代国際彫刻展出展（彫刻の森美術館）。75年、現代日本彫刻展（宇部市野外彫刻美術館/山口）、76/86年、ヴェネチアビエンナーレ出展。94年、写真と彫刻の対話ー安斎重男 眞板雅文展（神奈川県立近代美術館）。長野県富士見町の古民家をアトリエとする。95年、眞板雅文彫刻展（札幌彫刻美術館）。97年、眞板雅文展ー音・竹水の間（下山芸術の森発電所美術館/富山）。99年、森に生きるかたち（箱根彫刻の森美術館）、2000年、越後妻有アートトリエンナーレ出展。03年、眞板雅文展 音・竹水の間（大原美術館）。07年、眞板雅文アトリエ展開催（富士見町）。09年逝去。13年、眞板雅文 あめつちとの協奏（横須賀美術館）。

眞板　雅文
（まいた・まさふみ）
彫刻／インスタレーション

《水鏡》1989年

宮坂　了作
（みやさか・りょうさく）
絵画／インスタレーション／パフォーマンス



《諏訪湖に水を注ぐ》2017年：諏訪湖/諏訪市

「水に水を注ぐ」。このパフォーマンスは最小の行為で最大の表現を求めた作品です。諏訪湖畔で水を注ぎ、太平洋の清水港で水を注ぎ、日本海の直江津港で水を注ぐ。地球上の海や川、湖の水に水を返す、ナンセンスで自然に寄り添うパフォーマンスだと思っています。また、この発想は日本の俳句のような短い言葉による宇宙の表現行為は何なのかとの考えからです。アメリカのブルース・リーは、「カンフーの極致とは」の質問に、「水になれ（Be Water）」と言っています。この言葉にはいろいろと深い意味があります。私も少しでもこの境地に近づきたいですね。Be Water!!

1950年、長野県生まれ。70年、日本大学芸術学部入学。71年、現代美術家・高松次郎の私塾で学ぶ。72年、カリフォルニア芸術大学（C.I.A）留学、「ハプニング」の芸術家・アラン=カプローらに学ぶ。大学構内で《A・ファイア・フェスティバル》実施。73年、クーパー・ユニオン・アートスクール（ニューヨーク）に交換留学。74年、カリフォルニア芸術大学卒業（BFA）。75年、下諏訪町在住の観念芸術家・松澤宥と出会う。2016年、在る表現ーその文脈と諏訪（茅野市美術館）、19年、シンビズム３（上田市立美術館）出展。21年、植物文字と地図の絵画（軽井沢ニューアートミュージアム）、22年、水のふるまい/土のすがた（アンフォルメル中川村美術館）。

／water

《書物と物質》2020年：マツモトアートセンターGALLERY /松本市

北澤　一伯
（きたざわ・かずのり）
彫刻／パフォーマンス

2022年2月20日
「22の音素による音会幻想」
松澤宥100年祭

書物を知の体系の蓄積として捉え、場所に凝固する物質として美術の文脈に仮／編成する試み。地表より土中を想像する時、そこには暗黒が詰まっていると感じます。未読の書物というものは、歴史的思考や物語が、あたかも暗闇に内蔵されているかのようです。書物を場所に差し込み、間隙を組み立てていく状況を光の照射に譬（たと）えるならば、この試行は、書物と空間による時代の影を生みだすことになると考えています。

1949年、長野県生まれ。80～96年、《囲繞地》を発表。94～99年、アートキャンプ白州・風の又三郎（北杜市/山梨）参加。94～08年、《「丘」をめぐって 死んだ水うさぎ》を連作。94年、立ち上がる境界展（辰野町郷土美術館・旧日本通運事務所/長野）。96年、松澤宥とのコラボレーション（旧日本通運事務所）。2000年～《脱構築 こころの容器》連作。03年～NIPAF参加。09年、所沢ビエンナーレ引込線（西武鉄道旧所沢車両工場/埼玉）参加。16～18年、個展（アンフォルメル中川村美術館、アートスペースFLATFILE、からこる坐/長野）。19年、TAMAVIVANTII（多摩美術大学アートテークギャラリー）。